

昔、音田に気立ての優しい娘がいました。娘が一八の春、河之内金比羅さんの縁日に友達と参詣に出かけました。参拝の帰り道、雨滝神社にも立ち寄りしました。娘達は湊のほとりでしばらく休憩しましたが、そのうち、娘は大切にしていた櫛を思わず湊の中に落としてしまいました。しかし、拾うことはできず、後ろ髪を引かれる思いで帰りました。

ある夜、娘の家に見知らぬ若者が櫛を持って訪れました。男は色白で面長の美青年でした。娘は大喜びで、両親も快く若者を家に入れてもてなしました。若者と娘の間にはほのかな恋が芽生え、若者は毎夜のように会いに来るようになりました。しかし、なぜか若者のまなざしは鋭く、どこか冷たく漂う妖気があることに娘は気づきました。不審に思った娘は、ある夜意を決して男の肌を傷つけました。驚いた若者は闇の中に逃げ去りました。娘はこの次第を両親に打ち明け、血の跡をたどっていくと、雨滝の湊のそばで消えていました。

その頃、娘は身ごもっていました。やがて生まれた子は、蛇の子でした。驚いた一家は、思案の末に皿ヶ森の麓に葬ってしまいました。そのことを知った雨滝の蛇の精は嘆き悲しみ、黒雲を呼んで竜となって天に昇りました。すると一天にわかにかき曇り、雲は雨を呼び、竜の口は稲妻を吐き、号泣は雷となって天地にとどろきました。豪雨は七日七晩降り続いて、皿ヶ森に地鳴りが起こり、その後山津波が山裾を襲い、人家を押しつぶしました。

人々は竜神様に一心不乱に祈願しました。すると、豪雨が止み、土砂も流れ去りました。人々は竜神様の加護を信じ、祠を建てて祈り、その悲話を後世に伝えていきます。



背景

松山自動車道で松山から高松に向かうと、桜三里パーキングエリアを越えてしばらくして左手(北側)に皿ヶ森(標高634m)が見えてきます。この付近を中央構造線が通っており、たいへん脆い岩質となっています。今から200年前、この地域を襲った豪雨により皿ヶ森の南斜面で大崩壊が発生しました。崩壊した土砂は土石流となって下流の音田の集落を飲み込み、本谷川をせき止めました。

アクセス 竜神を祀った祠

- 川内ICより北東へ直線距離約5km
- 東温市松瀬川地区
- 緯度経度 北緯33度48分53秒, 東経132度56分58秒

